

短 報

連続携帯式腹膜透析 (CAPD) 療法と社会復帰に関する研究

田 中 福 恵^{*1}

要 約

慢性腎不全で連続携帯式腹膜透析 (CAPD) 療法を行いながら社会復帰を希望する患者は、HD 療法よりも CAPD 療法を選択する割合が高いことが明らかになっている。しかし、CAPD 療法を行いながら社会復帰した患者自身の言葉で実態を語ったものは少なく、生活と治療の状況がわかりにくい。そこで今回 CAPD 療法を行いながら仕事をしている 7 人の患者に面接調査を行った。社会復帰している患者の仕事や日常生活の状況、治療における自己管理の実態を明らかにすることが目的である。

調査の結果は以下の通りであった。

対象者 7 人とも CAPD 療法を選択したのは仕事がしたいという気持ちからであった。したがって自分の病気や治療、必要な知識や技術についてよく理解しており、きちんと自己管理が出来ていることが認められた。職場では、4 人が現場の仕事からデスクワークに変更となり、体力的にきつくても今まで通り慣れた仕事がいい、という両者に分かれた。職場では、皆が協力的で、ほとんどの人が、できるだけ定年まで働きたいと考えていることがわかった。

はじめに

慢性疾患は、終生その病気をうまく自分でコントロールしながら付き合っていかなければならない。慢性腎不全の治療法である透析療法の目的の 1 つは、生活の質 (Quality of life: 以下 QOL) を追求することであり、ただ単に腎不全という生命危機に対する対象療法だけでなく、患者の充実した家庭生活、社会復帰を追求するものである。連続携帯式腹膜透析 (Continuous Ambulatory Peritoneal Dialysis: 以下 CAPD) が在宅で可能であることの本来の意味は、患者の社会復帰、ひいては QOL に寄与することへの期待である¹⁾。

透析患者の社会復帰について、日本透析医学会統計調査委員会の統計調査によると、就労している患者の割合は、男女ともに CAPD 患者が、血液透析 (Hemodialysis: 以下 HD) 患者よりも高い。社会復帰を指向する患者は、CAPD を好んで選択する傾向があることを示唆している^{2,3)}。

ところで CAPD 導入後の問題を新村ら⁴⁾ は、仕事内容や職場の変更および減収を伴いやすく、家族へ与える影響も大きいと述べている。つまり慢性疾患は日常の生活にさまざまな問題 (管理上の養生法、生活時間の調整、生活上の孤立など) をもたらすこ

とを指摘している。しかし、在宅治療の状況や日常生活について、患者自身からの言葉や気持ちを表したものが少なく、実態が明確になっていない。そこで今回、社会復帰している CAPD 患者の仕事や日常生活の状況、自己管理の実態を明らかにすることを目的に実態調査を行った。

研究 方 法

1. 研究期間

2001年7月20日～9月28日

2. 調査方法

面接によるインタビュー調査

3. 調査施設

岡山市 S 総合病院透析センター (以下 S 透析センターという) で、ここでは HD と CAPD の両方を行っており、2001年7月現在 S 透析センターの患者数は146人で、内訳はHD45人、CAPD101人であった。

4. 調査対象者

調査対象者の選択は、次の条件に当てはまる患者とした。①最初の透析導入が CAPD であったこと。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 田中福恵 現住所 〒700-0984 岡山市桑田町11-12-901

②CAPD導入後、在宅で自己管理ができていること。
③CAPD導入後、社会復帰してフルタイムで仕事をしていること、である。さらに体調等を考慮して、④S透析センターの責任者より紹介された患者で、調査の目的を説明し了解が得られたのは7人であった。

5. 面接場所

対象者へのアプローチは、患者がCAPD外来を受診する日に出向いて説明し協力を依頼した。承諾の得られた患者を対象として次回、面接をする約束をした。面接の場所は対象者の希望する場所で行い7人中2人は自宅で、1人は自宅近くで、4人はCAPD外来の診察日を希望し、個室的な待合室でプライバシーが守れる環境下で行った。

6. 調査内容

インタビューは筆者が作成した半構成質問紙を使用した。面接は1回の面接時間は40分から1時間30分で、1人の対象者に2～3回行った。録音テープの承諾が得られたのは自宅と近所で行った3人のみで、他の4人は本人の口述を確認しながら側で筆記を行った。1回目の面接で半構成質問紙を使用し、2回目以降は前回の面接内容の逐語記録を提示して記述の内容を確認してもらい、その後自由に話ができるように面接を行った。

7. 倫理的配慮

研究への協力依頼書で、本研究の目的と協力してもらおう内容を説明した。協力依頼書には、一旦承諾しても途中でこの研究への協力を拒否できること、データは本研究以外には使用しないこと、苦痛に感じることは話さなくてよいことも説明し、以上は書面により承諾を得た。

8. 分析方法

録音テープと口述記録の内容を逐語記録に書き起こし、患者に確認してもらった記録をもとに、慢性疾患病棟で管理者の任にあるベテランナースにアドバイスを受けた。

結 果

インタビューの内容は、対象者の概要を表1に、対象者のCAPD導入後の仕事に関連した事項を表2に、対象者のCAPDバッグ交換の時間を表3に示した。

対象者7人の内訳は男性6人、女性1人で、年齢は49歳～63歳、平均年齢は55歳であった。以下【】

は表の項目を、「」は患者の言葉を示す。表1の【基礎疾患】では慢性糸球体腎炎4人、糖尿病・糖尿病性腎炎2人、高血圧性腎硬化症1人であった。近年糖尿病が増加してそれに伴い糖尿病性腎症から人工透析に導入の患者の割合が高くなっており⁵⁾、本調査でも7人のうち2人存在しているのが注目される。【CAPD継続期間】は短い人で1年1ヶ月、長い人で7年、平均3.9年であった。【家族構成】では7人とも家族と同居しており、「協力的」と答えていた。男性6人は配偶者が存在し、女性1人は配偶者が死亡して1人娘夫婦と同居していた。【CAPDと日常生活での思い】では、7人とも「CAPDの導入は仕事を続けるため」と答えていた。さらに「一生CAPDを続けたい」「CAPDと仕事は生活のリズム」「いつもバッグ交換に追われている感じ」「人に弱みを見せるのはイヤ」などの思いが語られていた。

表2の【仕事変更の有無】では、7人とも元の職場に復帰していたが4人が仕事内容を変更していた。仕事内容の変更ありでは主にデスクワークに、仕事内容の変更なしでは、最初からデスクワークであり体力的な問題はなかった。一方体力的、衛生的な環境に厳しいと思われる職場でも「慣れたところがいい」とそのままの人もいた。【収入の変化】では、ありが3人、なしが4人で、ありが3人とも「ダウンした」と答えていた。【仕事を継続することへの思いと職場環境】では、「今では仕事は縁の下の力持ち、表面には出ないが割切っている」「上司がCAPDを理解してくれないのが辛い」「定年まで働きたい」「仕事を辞めたら寂しい」などの思いが語られていた。

表3の【職場にバッグ交換室の有無】ではあり3人、なし4人であった。ところで、7人の昼バッグ交換の状況は、しないが3人、職場と自宅が近いので自宅に帰って行くが2人であった。他に2人が職場で行っており、内訳は1人が医務室で、もう1人は個室が使用できるが休憩時間の都合上、食堂の片隅をスクリーンで隠し、食事摂取をしながらバッグ交換を行っていると言った。

考 察

仕事(収入を得る)をするということは、自分や家族の生活を支える、あるいは自己実現や遣り甲斐など、人それぞれの思いで生活の中に組み込んでいる。しかし健康が損なわれて思うように仕事が出来なくなった時には、たちまち今までの生活に破綻を来してしまうことになる。それゆえ大部分の人は病気になるだけでも出来るだけ早く社会復帰をしたい、仕

表1 対象者の概要 (n=7)

対象者	性別	年齢	基礎疾患名	CAPD継続期間	家族構成	CAPDと日常生活での思い
A	男性	58	慢性糸球体腎炎	7年	母・妻・娘と同居 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは仕事を続けるために決めたが、自分のためでもある ・一生CAPDを続けたい ・決まった時間に出勤や退社 CAPDの時間がある ・夜のつきあいはおろそかになるがしかたがない
B	女性	52	慢性糸球体腎炎	5年	娘夫婦・孫2人と同居 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは自分のため、家族も協力的。仕事から帰れば食事ができていて食べるだけ ・家で家事は何もしない。掃除は自分の部屋のみ ・日常生活では人を頼りにせず、全部自分でする弱みを見せるのがイヤだから ・県内出張も多くその時は自分の車の中で交換する
C	男性	63	糖尿病 糖尿病性腎症	5年6ヶ月	妻と2人暮らし 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは自分のため、自己管理が大切である ・いくら医者や看護婦が言っても自分がいかに自己管理をするかだと思う ・朝夕はインシュリンの注射、1日3回の透析、薬は8-9種類飲みながらやってきた
D	男性	50	糖尿病 糖尿病性腎症	1年1ヶ月	妻・娘と同居 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは自分のことなので大事にする ・何かあっても大変なのは自分なのできちんとする ・職場は鉄工所の現場で暑くて汗がたくさん出て衛生的とは言えないが慣れた仕事がいい ・お腹のカテーテルの消毒には特に気を遣う ・皆に嫌われないよう努力している ・友人や近所の人とも普通に付き合う
E	男性	53	慢性糸球体腎炎	1年5ヶ月	妻・娘と同居 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは仕事を続けるために決めたので、頑張るしかない。手動で1日5回。 ・いつもバッグ交換に追われている感じ ・バッグ交換しながら居眠りしていることもしばしばある ・ゆっくり眠りたいと思う時がある ・近所や親戚の付き合いは妻がする
F	男性	60	高血圧性腎硬化症	2年4ヶ月	母・妻と同居 近くに娘夫婦がいる 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは仕事を続けるために決めたので、頑張っている。 ・夜の付き合いも9時にはきり挙げて帰り10時には器械につないで寝る ・果物が好きだが自分はちょっと食べてもすぐカリウムが高くなり食べられずつらい ・いずれ血液透析になると思うので、それまで妻と旅行でも楽しみたい
G	男性	49	慢性糸球体腎炎	6年10ヶ月	母・妻と同居 協力的	<ul style="list-style-type: none"> ・CAPDは仕事を続けるために決めたので、時間もきちんとこだわってきた ・しかし、最近は±1時間くらいは平気になった ・付合いに長い時間が取れないので釣りにいけない ・仕事は楽しかったがそろそろ趣味を楽しみたい

事したいという気持ちになるだろうと思われる。完全に回復するまでじっと座して待つのではなく、病気と生活と仕事の折り合いをつけ、働きたいという人は多いと思われる。

ところで今回の調査では、女性より男性の割合が高かったため男性の思いがよく語られている。しかし今回の女性はフルタイムできちんと仕事をしており、結果にほとんど性別の大差は認められなかったと思われる。今回のインタビューでは、CAPD患者の治療と生活や仕事について、実態の一端を明らかにした。CAPDを行いながら社会復帰して仕事を

うためには、毎日6時間ごとのバッグ交換、バッグ交換のための清潔操作、腹部に留置したカテーテルの清潔保持など、いろいろと制約が多い。したがってきちんと自己管理できる強い意志が必要とされるのである。表1【CAPDと日常生活での思い】では7人とも「CAPDは仕事を続けるため」と答えているが、まずは「CAPDは自分のため」と捉えていて、そのためきちんと自己管理のポイントを守り、生活リズムの中に組み込んでいると推察された。中でもバッグ交換は時間が決められているため何事にも優先することであり、人との付き合いに制約が生じて

表2 対象者のCAPD導入後の仕事に関連した事項(n=7)

対象者	性別 年齢	仕事変更の有無 現在の仕事の内容	収入の変化	仕事を継続することへの思いと職場環境
A	男性 58	・あり ・以前は外で電気 工事の仕事 ・今はデスクワーク ・管理職 ・一日中パソコンを 使用	・あり 第一線の仕事 を離れて社内 の仕事になった ので	・CAPDは仕事を続けるために決めたが自分のためでもある ・仕事は自分の為の生活リズムだと思っている。だから仕事は休まないことと、体調に気をつけている ・CAPD導入の最初はよく休んだ。仕事の変更になじめなかった ・同僚ともうまく行かなかつたし、辞めようと辞表を出したら引きとめられた ・今では仕事は縁の下の力持ち。表面には出ないが割り切っている
B	女性 52	・なし ・役場勤務 ・中間管理職 ・県内で出張も多い ・一日中パソコンを 使用している	・なし	・最初はしんどかったが5年もたつと楽 ・やりがいとか生きがいとかは特にないが、仕事をしないと生活できないので続けている ・勤務場所は自由がきくので仕事はやりやすい ・続けられるなら定年まで頑張っておきたい
C	男性 63	・なし ・農機具会社の 管理職 ・デスクワークが主 ・出張が多く年間 100日位 ・出張先は全国	・なし	・仕事が続けられるのは、当然うれしかった。楽しく仕事をした ・周囲が気遣ってくれた ・CAPDだから、こうやって皆と同じように働けるのはうれしい ・仕事を続けるためには体調に気をつけ、決まった自己管理や当たり前のことを当たり前にする ・仕事で出張があり全国へ行く。ライトバンに日数分の透析液と必要物品を乗せていく。バッグ交換はホテルの部屋や車の中でする ・夏の出張はバッグ交換の時木陰に車を止めてもクーラーを入れられないので、汗がダラダラ出て大変だ ・仕事と命をともししてきた。仕事は性に合っていてイヤではない
D	男性 50	・なし ・鉄工所。現場作業 作業場は37℃にも なるが換気扇も ない	・あり 手取りで30万 円から23万円 に下がった	・職場は鉄工所の現場で、暑くて汗がたくさん出るが水も飲めない ・衛生的とは言えないが、慣れた仕事がいい ・仕事はチョットでも油断すると怪我をする危険性が高く、非常に神経を使う。30年間事故もなくやってきた ・仕事に対する誇りもあり、人から信頼もされている。 ・生活のために働かなくてはならない子どもはまだ5歳なのでできれば定年まで働きたい。仕事は自分の生活になっている
E	男性 53	・あり ・以前はゴルフ場の 総支配人 ・現在はキャディ マスター、管理職 営業	・なし	・CAPDは仕事を続けるために決めたので頑張るしかない ・仕事をしている方が張り合いがある。仕事は生きがいである ・職位が下がった今の方が仕事はきつい ・辛くはないが頑張るしかない ・上司がCAPDを全く理解しようとしてくれないのが辛いところだ ・会社がどこまで認めてくれるかわからないが、希望としては定年まで働きたい
F	男性 60	・あり ・以前は管理職 ・現在工場内の 立ち仕事 ・ガーデニングの 垣根、ブロック作り	・あり ダウンした。が これはCAPD とは関係なく 会社の規定。 58歳から下がる	・最初からCAPDを選んだのは仕事をしたかったからだ。仕事では人に負けないように意地も愛着もある。 ・家にいてばかりではおもしろくない ・自分が辞めたら後、職場がどうなるか気がかり ・今までもう辞めたらといわれていたが、お金のことだけでなく仕事を辞める決心がつかなかった ・仕事を辞めたら寂しい感じがする。
G	男性 49	・あり ・以前は設計関係 の仕事。現在は 物品管理、維持 管理の仕事 ・一日中パソコンを 使用	・なし	・CAPDは仕事を続けるために決めた ・仕事はうれしくもあり、辛くもありその時その時 ・一日中パソコンを使うのでよく眠たくなる ・職場は協力的で疲れたら休める。午前中30分、午後30分は寝ている ・ある程度収入を得ないといけないので、55歳の定年まで続けたい ・以後63歳まで可能。昇給が止まるだけ。55歳以降いつ辞めてもよい ・仕事は楽しかった

もやむを得ないことと考えられる。【仕事の変更の有無】では、4人が仕事内容を変更していたが、腹部にカテーテルを留置しているため、屋外の埃りっぽい環境よりは感染予防や体力的な配慮から変更したと考えられる。またデスクワークへの変更が適し

ているようだが、中高年者にはパソコンが苦手という人もおり、本調査でもそういう人が認められた。会社の状況によっては今までと同じように体力を使用する職場や、本人が衛生的環境でないと感じつつも「慣れた仕事が良い」と以前と同じ仕事に復帰し

表3 対象者の CAPD バッグ交換時間

対象者	性別	年齢	バッグ交換の時間	職場にバッグ交換室の有無
A	男性	58	19:00 手動で1回目 22:00 器械につなぎ朝6:00まで3回交換	なし 会社では昼、バッグ交換をしていない 昼バッグ交換をすることになれば辞める
B	女性	52	昼休み 手動で1回目 22:30 器械につなぎ朝6:30まで3回交換	あり 保健センターがあるのでそこで出来るが 昼は家が近いので帰ってすることが多い
C	男性	63	出張時: 手動で3回 6:00, 15:00, 22:00 出張なし: 18:00手動で1回 22:00器械につなぎ朝5:00まで2回交換	あり 会議室など使えるが、昼バッグ交換を することはない
D	男性	50	出勤日: 7:00, 11:00, 17:30, 20:00 休日: 7:00, 11:00, 15:00, 17:00	なし 自宅と職場は車で5分。昼食に帰宅し 食事しながらバッグ交換をする
E	男性	53	手動で1日5回 5:30, 12:00, 18:30, 21:00, 23:00	なし VIPルームを使用出来るが、昼食を 摂りながらバッグ交換をせざるを得ない
F	男性	60	18:00 手動で1回 22:00 器械につなぎ朝6:00まで3回交換	なし 職場でバッグ交換をしない
G	男性	49	12:00, 18:00, 手動で2回 21:30 器械につなぎ朝6:30まで3回交換	あり 専用の医務室がある

* 1回の交換時間は約30分

ている人もいた。中には“仕事を変更して CAPD を人に知られたくない”という人がいることも推察される。【職場にバッグ交換室の有無】では、昼休みに自宅に戻り食事しながら行っている人もいた。しかし、職場にバッグ交換室のない人で、食堂の片隅をスクリーンで囲い昼食をしながら、バッグ交換をせざるを得ない人もおり、職場の上司に相談しても理解が得られないという悩みを抱えていた。このような人には医療者として、何時でも、どこでも悩みや相談に応じられるような体制を準備して、患者の精神的な安心感を支える必要があると思われる。【仕事を継続することへの思いと職場環境】では、「周囲も協力的で仕事が楽しい」「できれば定年まで働きたい」とほとんどの人が答えていた。このように調査した7人は、家族や職場の人々の協力、さらに CAPD 業者や医療者の連携など多くの支援のもとに、仕事を継続することが実現できていると考えられる。

ま と め

CAPD を行いながら社会復帰して、仕事をして

文 献

- 1) 中川成之輔：腹膜灌流と CAPD の原理。太田和夫，中川成之輔，川口良人編，CAPD の臨床。改訂第2版増補，南江堂，東京，5-20，1998。
- 2) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現状（1999年12月31日現在）。透析会誌，34(1)，1-31，2001。
- 3) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現状（1995年12月31日現在）。透析会誌，30(1)，1-25，1997。

いる患者のインタビューから、治療におけるバッグ交換や自己管理、職場環境や仕事への思い、日常生活の状況など実態の一端を明らかにすることが出来た。その結果、CAPD を行う患者の前提条件として自己管理能力が必要といわれているが、今回調査した7人は、在宅できちんと自己管理ができていることが認められた。また家族や職場の人々の協力、さらに仕事を継続するためには CAPD 業者や医療者の連携など、多くの支援のもとに実現できていると考えられる。

本研究にこころよく協力していただき、貴重な体験を語ってくださった CAPD 患者の皆様にご心より感謝いたします。また研究の趣旨をご理解いただき、便宜をお払いいただいた S 総合病院透析センター医師の H 先生、M 看護師長様、ご指導くださいました大澤源吾教授に深謝いたします。

なお、本研究は平成14年度川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究所保健看護学専攻の修士論文の一部に加筆修正したものである。

- 4) 上村直子, 植田さとみ: 依存期から導入期の看護, 透析患者のための臨床心理的アプローチ, 第2版, 文光堂, 東京, 20-31, 1999.
- 5) 厚生統計協会編: 国民衛生の動向, 厚生指標. 48(9), 東京, 92-94, 2001.
- 6) 寺島益雄, 斎藤明: 糖尿病性腎症と末期腎不全の代替療法, 臨床看護2, へるす出版, 東京, 159-163. 2003.

(平成17年5月31日受理)

Study of Continuous Ambulatory Peritoneal Dialysis (CAPD) and Rehabilitation in the Community

Fukue TANAKA

(Accepted May 31, 2005)

Key words : capd, rehabilitation

Correspondence to : Fukue TANAKA

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Corresponding address : 11-12-901, Kuwata-cho,
Okayama, 700-0984, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 249-254)